



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道旭川市近文アイヌコタンとキリスト教：聖公会近文伝道所と歴史的考察
Author(s)	千里, 政文
Citation	基督教學, 56-57, 24-36
Issue Date	2022-11-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92840
Type	journal article
File Information	02chisato.pdf



北海道旭川市近文アイヌコタンとキリスト教

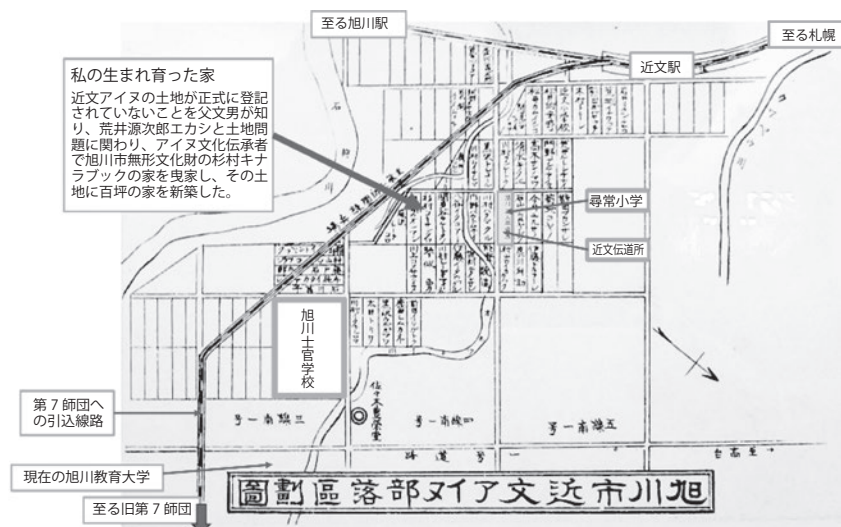
— 聖公会近文伝道所と歴史的考察 —

千里政文

一 はじめに

『基督教』二八号の夕張教会調査時に「どうして聖公会のアイヌへのキリスト教伝道はとぎれてしまったんだろう」と故川島洋一教授がつぶやかれたのが心に残っていた。川島教授が晩年近文アイヌの調査をしていた事はアイヌの方々から聞かされていたが、私自身旭川の近文アイヌの中で育ってきたことをあえて伏せていた。本研究は近文アイヌにおけるキリスト教伝道の中心となった聖公会近文伝道所の調査から①聖公会近文伝道所はどの様な建物だったのか、②なぜ近文でのアイヌ伝道がとぎれたのかを明らかにし、③近文アイヌとキリスト教の研究や資料等を次の研究者へつなげるために情報提供する事を目的としている。旭川の近文アイヌを語る前に、私自身の話をする必要がある。私の両親は第二次世界大戦終結時に樺太から命からがら引き揚げたシャモ(和人「シサム(隣人)」の俗語で、北海道に逃げ帰った引き揚げ者として周囲は冷たく、家を借りるのも大変で道内を点々としながら生活し、そのような中、旭川近文アイヌの方々が温かく受け入れてくれ、そこで借家生活をはじめた。父である千里文男は、冬は大雪山の山奥で山子(木樵)の山頭(日給五千円)、夏は大工(月給五千円)をしていた。アイヌ文化伝承者で旭川市無形文化財の杉村キナラブックの家を曳家(家をそのまま隣に移動)し、その土地を売ってもらい、山子(木樵)として稼いだ現金で五〇

坪のアパートと五〇坪の住宅を建て建設会社を立ち上げた。当時アイヌの土地が正しく登記されていないことをきっかけに、文男は荒井源次郎エカシ（長老）と共にアイヌの土地問題に関わっている。当時アイヌでは熊彫が収入源となっており、文男は山子として働きながら、製材として利用されない大木の切り株をアイヌの熊彫り材料として無償提供していた。また熊彫場も私を含む子ども達の遊び場で、まわりのほとんどがアイヌまたはアイヌとシヤモの混血で、家の前で「イオマンテ」という儀式を再現していたり、丸太船制作を再現したり、儀式道具作り等アイヌ文化の再現を見て育ち、私の実家はキナラブックと本籍が一緒で、同じ町内に千里（ちさと）というアイヌの夫婦がいた。千里がちりと読めるためか、知里（ちり）幸恵の関係者ともよく間違えられてきた。幼馴染の多くがアイヌの子どもたちで一緒に育ったため、幼少期よりアイヌと共に使っていた言葉が現在では差別用語である場合には御了承頂きたい。子どものころキナラブックがくると唇の入れ墨が怖く逃げていたのを思い出す。私自身アイヌと間違われて気にしたことはないが、アイヌは和人が育てられなくなった子ども達も多く育てており、コタンで支えあい生活しているところこそアイヌ（人間の意）なのではと考えている。



地図 1887 年（明治 20 年）、旭川村と鷹栖村の間に位置した近文の地に、永山、当間、比布などに点在していたコタンをまとめるという政策がとられ、アイヌ約 50 戸が近文へ移住させられた。詳しくは⑩金倉義慧『旭川・アイヌ民族の近現代史』参照。

二 近文アイヌの調査

最初の調査は、いまから三十年程前になるが旭川アイヌ文化伝承者 杉村キナラブックの三女 杉村フサ（有形・無形文化伝統者）への聞き取りで、聖公会近文伝道所について聞いたが「わからない」と言われた。それが疑問であった。何故なら杉村キナラブックと聖公会近文伝道所のバイブルウーマン（婦人伝道師）金成マツは友人で、金成マツはキナラブックの裏の琴似家に一時、間借りしており、フサが伝道所を知らないはずはないと考えている。私とフサとは家族ぐるみで親しく、真剣に考えてくれたので嘘をついているとは思えず、そもそもキリスト教の伝道所とは思わなかったのではないかと感じられた。この研究を再開しはじめたころ再度、聞き取り調査を考えていたがフサは高齢で体調を崩し、その後亡くなられ重要な機会を逃した事を後悔している。

三 聖公会近文伝道所について

近文アイヌへのキリスト教伝道の拠点となったのが聖公会近文伝道所であるため、アイヌにキリスト教教育を行い、伝道所の設立と運営に大きく関わっていた聖公会宣教師ジョン・パチエラー、聖公会のバイブルウーマンとして近文伝道所で生活していた金成マツと養女の知里幸恵に関する研究や書籍を調査し、関わりのある長老派宣教師ジョージ・ベック・ピアソンなども幅広く調査し、伝道所の役割や、どのような建物であったかを研究した。

三の一 聖公会近文伝道所の役割

この伝道所を調査してみると「旭川聖公会宣教百年史」に一九一〇年「アイヌの人のための「レスト・ハウス」近文休養所を設立」と記載されており、他の文献には近文休養館・近文講義所・近文伝道所とも書かれている。その役割を調査した結果、「キリスト教の宣教の他、ユーカラ・歌・踊りを楽しむ社交の場となっていたようである。さら

に聖公会旭川マルコ教会に転勤となった看護師でもある婦人宣教師ミス・A・エバンス（第一次世界大戦が始まり退職し翌年帰国）と石川光子（石川啄木の妹）がマツの日曜学校を手伝いに来ていたことで、病人を休ませるレストハウスとしても使われていた。その他にも、手紙の代筆、花の苗の配布、コタンで唯一の新聞が読める場所、日曜学校、読み書きの指導、お菓子をもらせる場所」と用途は様々なため、当時のフサはキリスト教の伝道所とは認識できなかったのかもしれない。

三の二 聖公会近文伝道所はどのような建築物であったか

伝道所の写真や文献、研究者が描いた複数の図面を調査し、以下の事がわかった。

- 藤本英夫 『知里幸恵 一七歳のウエペケレ』 七六―七八頁より。①「玄関ホール？は一坪ほどの土間と、板敷のもう一坪の上り場、脱いだ靴や下駄は土間左側の棚に置く、玄関ホールの右隣続きにオルガンのある六畳くらいの伝道室、幸恵はここで勉強してきた。伝道室続きに、やはり六畳で寝室。玄関ホールの奥に板敷三坪の台所付き茶の間。いわばダイニングキッチンで、真ん中にアイヌ式切り炬があった。茶の間続きの土間が炭や漬物の樽などを置く物置場。その右、台所の裏側に仕切られて狭いトイレ」。②「近文聖公会日曜学校と一mほどの長さの看板、玄関が一坪ほど、そこを入った右側がオルガンを置いた六畳間の伝道室、その奥も六畳、玄関から真つ直ぐのところは四畳半、その奥に板敷三坪たらずの台所付きの茶の間が続いており、さしづめダイニングキッチンと言ったところ。茶の間つづきには土間があり、そこは物置になっていた。ここから右に狭い廊下づたいにトイレがあった。猫三匹も。サルコップ、サンコ、エトリンネ」。③砂沢クラさんより「普通の和人の一階建て。玄関を入ると、廊下を挟んだ右手に八畳間の和室の教室が二つ、左手に金成さんと幸恵が住んでいた六畳間と台所、風呂があった」。
- 須知徳平の『北の誌と人 知里幸恵の生涯』三八頁より。「祈禱所と集会場を兼ねた八畳間と六畳二間と台所、柁

葺の小さな平屋。玄関わきに近文聖公会日曜学校1mほどの看板。民家の一室をかりていた（日曜学校が建つ前）。

以上の結果から平面図作成を試みたが、矛盾が生じるため、あえて図面化するのは避ける事とした。ここで新たな発見もあった。遠軽家庭学校礼拝堂調査でお世話になったピアソン記念館に、ピアソンが米国に送った聖公会近文伝道所前とされる写真があり、ジョン・パチエラー夫妻、ピアソン夫妻、知里幸恵、金成マツ、救世軍の軍服を着た者も写っている。パチエラーとピアソンが近文アイヌ伝道で協力していたことは知られているが、救世軍も一緒に写っている貴重な写真である。そこで金成マツや知里幸恵の関連書を調査してみると、近文伝道所の日曜学校で長老派のピアソン以外に救世軍も日曜学校を開いていることがわかり、近文伝道所に救世軍も関わっていた事実が明らかとなった。さらにマツは救世軍に対しては「面白くおもっていないかった」との記載もあった。知里幸恵の日記には救世軍へのあこがれが書かれており、聖公会のバイブルウーマンであるマツには複雑な気持ちであったのかもしれない。また、アイヌの資料の中に救世軍信者として砂澤一太郎、ベラモンコロ夫妻が家庭集会を毎週木曜日開いているという書籍も発見した。

四 なぜ近文でのアイヌ伝道がとぎれたか。

ジョン・パチエラーは静養地の函館でアイヌ民族のことを知り、アイヌ伝道を志し、一八七九年にはCMSの信徒伝道者に任命され、函館を拠点にアイヌへの伝道活動を始めた。彼は幌別村（現在の登別）を訪れ、アイヌヘキリスト教教育のほか、アイヌ



玄関前での集合写真（ピアソン記念館所蔵）



語教育をはじめ、幌別村のアイヌで実業家の金成リキ（喜蔵）や息子金成太郎、従妹の姉金成マツや妹知里ナミに出会い、一九〇七年から三年間近文講義所の管理者となっている。一九一〇年にレストハウス（近文休養館）として新築する。金成マツは函館の愛隣学校卒業後、一八九八年平取村の教会でバイブルウーマン（婦人伝道師）として勤務し、一九〇九年旭川近文講義所（聖公会近文伝道所）に転勤、ここで枕生活のマツの世話をする母モナシノウク、秋には知里幸恵を養女として預かり共に住んでいた。この伝道所は、近文アイヌへのキリスト教宣教の他、モナシノウクが住んでいることでユーカラ・歌・踊りを楽しむ場となっていた。しかし、幸恵が一九二二年五月、東京の金田一京助の許に上京し、四ヶ月後、持病の心臓病悪化により十九年の生涯をとじる。一九二六年、日本聖公会がイギリス聖公会から独立して伝道師制度が変わり、一九二八年、イギリス聖公会から独立を機にマツは五〇才で退職し、幸恵が残した『アイヌ神謡集』の後をつなぐため、近文伝道所を離れ東京の金田一京助の許で「金成マツノート」と言われる「大学ノート一万余千ページ」にのぼるユーカラなどのローマ字記述を成し遂げる。マツが近文を去った後は、熱心な救世軍の砂澤一太郎と妻ベラモンコロが自宅で日曜学校を引き継いたが、その後民芸品を販売するため阿寒へと移り、第二次世界大戦直前の一九四一年には、アイヌ伝道に力を注いでいたバチエラーが北海道を去り、戦争により近文でのアイヌ伝道がとぎれていったと考えられる。

五 おわりに

本研究では、聖公会近文伝道所の建物の平面図を作成することは出来なかったが、民家に近い形状であった事は予想できた。建物は、聖公会のバチエラーや長老派のピアソン、さらに救世軍の日曜学校として使われており、教派をこえた伝道所として使われていた。また、そこはマツやその母が住んでいたことにより、同化政策で消えていた近文アイヌへのアイヌ文化伝承の拠点となったこと、さらに知里幸恵が文字を持たなかったアイヌの伝承を日本語に

訳し、アイヌ文学のレベルの高さ、その美しい詩が世界に公開されることになったことは重要である。

一時は近文アイヌの大半がこの伝道所に通っていたとされるが、今の近文アイヌの間でもキリスト教の伝道所があったことはほとんど知られていない。伝道がとぎれた理由は、マツが旭川を去ったことに加え、第二次世界大戦によりアイヌ伝道の中心にいたバチエラーも日本を去ったこと、元々あったアイヌに対する強い差別に加え、戦争により聖公会に対するキリスト教弾圧が強まったことも大きな理由と考えられる。

あまりに身近な方々の調査になるため近文アイヌに関わる研究を避けていたが、重要なアイヌ伝承や歴史を知っている方々が高齢になり世を去り、数年前まで私の実家に遊びに来ていた、高齢のアイヌの方達も体調を崩して聞き取り調査が出来なかった。新型コロナウイルス感染症により調査を中断中に亡くなられた方もおられ、もう少し早く研究をしていればと悔やまれる。私を育ててくれたアイヌの方々の過去を探るような気がして、また、子ども時代は何故アイヌが虐めにあっていたのかかわからず、アイヌ差別の現実を知るたびに悲しみと苦しみにさいなまれ、何度もこの研究から逃げていたが、知里森舎をはじめ北海道博物館等多くの方々の協力と支えにより研究を続けることができ、心から感謝する。

最後に、近文アイヌコタンに暮らしていた者として、近文アイヌとキリスト教の研究を次の研究者へつなげるため、聖公会近文伝道所に関わる人物の説明、参考文献等を以下に資料として記載する。

資料

聖公会近文伝道所及びアイヌ伝道に関係した人物

- ① ジョン・バチエラー (John Batchelor、一八五四年三月二〇日—一九四四年四月二日)。アイヌの父として敬愛されたイギリス人宣教師。一八七七年、香港で学んでいる時健康を害して、静養地の函館でアイヌ民族のことを

知り、アイヌ伝道を志すこととなる。一八七九年、CMSの信徒伝道者に任命され、函館を拠点にアイヌへの伝道活動を始める。一八八五年、幌別村（現在の登別市）を訪れ、アイヌヘキリスト教教育のほか、アイヌ語教育をはじめ（幌別村のアイヌの実業家、金成リキ（喜蔵）や息子金成太郎、従妹の金成マツやその妹知里ナミ）。一八八六年、布教活動のため、函館の住居を幌別に移して定住する。一八九二年、札幌に転居する。一九〇六年、向井富蔵の娘、八重子がバチエラーの養女となり、後に平取や幌別で伝道師として活躍する。一九〇七年、バチエラーは三年間近文講義所の管理者となる。一九〇九年八月、新会堂に着手、一二月に落成した。一九一〇年、レストハウス（近文休養館）を新築する。一九一四年、札幌にアイヌの子弟を收容する寄宿舎「アイヌ保護学園」を建てる。一九四一年、第二次世界大戦直前、北海道を去り、一九四四年、祖国イギリスで死去。

② ジョージ・ペック・ピアソン（George Peck Pierson、一八六一年一月一日—一九三九年七月三十一日）。旭川では長老派教会（現在の日本キリスト教会）の宣教師。北見にピアソン記念館があり、ピアソンに関わる資料が展示されている。

③ 金成リキ（喜蔵）。金成太郎の父。実業家でキリスト教を信じていた金成リキ（喜蔵）は、バチエラーの勧めで幌別村に私塾「相愛学校」を創設し、その校長に金成太郎がなってアイヌの子どもたちを教えた。のちに「愛隣学校」になる。

④ 金成太郎（一八六〇年—一八九五年）。バチエラーにアイヌ語を教え、聖書のアイヌ語翻訳を行った。一八九七年にはアイヌ語の新訳聖書を発行。二五歳でアイヌ最初の洗礼を受け、アイヌ最初の伝道者になる。三五歳で肺結核により死去。

⑤ 金成マツ（アイヌ名イメカヌ、一八七五年一月一〇日—一九六一年四月六日）とその妹、知里ナミ（アイヌ名ノアカンテ、知里幸恵と知里真志保の母親、一八七九年—一九六四年）。太郎の従妹で優秀なイメカヌとノアカ

ンテ)の姉妹は、函館の愛隣学校を卒業後、一八九八年平取村の教会でバイブルウーマン(婦人伝道師)として十二年間務めた。一九〇二年、ナミが知里高吉と結婚。マツは一九〇九年、旭川近文講義所に転勤し、秋には幸恵を養女として預かる。マツは十六歳のとき怪我のために半身不随で二つの杖歩行となり、母モナシノウクが生活の世話をする。

一九二六年、日本聖公会がイギリス聖公会から独立して伝道師制度が変わり、一九二八年、それを機に五〇才で退職、退職金で登別の知里高吉・ナミ宅隣に小さな家を新築し住まう。幸恵が残した『アイヌ神謡集』の後をつなぐため、近文伝道所を離れ東京の金田一京助のもとで、「大学ノート一万数千ページ」と言われるユーカラなどのローマ字記述を成し遂げた。『金成マツノート』と呼ばれている。

- ⑥ 知里幸恵(一九〇三年六月八日―一九二二年九月一八日)。父高吉と母ナミの間に生まれる。高吉の熊狩りでの猟銃事故により、その補償のため困窮し、六歳の時、近文コタンにいる祖母モナシノウクと伯母金成マツの養女になり、聖公会近文伝道所に暮らしながら隣接する尋常小学校を卒業している。文学的才能を金田一京助に認められ、アイヌ神謡集(アイヌしんようしゅう)出版・校正のため一九二二年五月上京し、四ヶ月後、持病の心臓病悪化により十九年の生涯をとじる。翌年『アイヌ神謡集』が刊行される。(参考文献 中村敏『日本プロテスタント海外宣教史』新教出版社、二〇一一年他)。

- ⑦ 砂澤一太郎と妻ベラモンコロ。金成マツが登別に帰った後、熱心な救世軍の砂澤一太郎(トアカンノ)と妻ベラモンコロが自宅で日曜学校を引き継いだ。彫刻家、砂澤ビツキの両親。救世軍によるアイヌ伝道については砂澤ビツキ関連書籍を調査する必要がある。また、砂澤ビツキは親に勧められ、彫刻家、藤戸竹喜に一時弟子入りしている。

- ⑧ 藤戸竹喜、アイヌの彫刻家。ジョン・バチエラーから洗礼を受けた祖母藤戸タケが育ての親。近文アイヌの杉村

フサが姉のような存在と竹喜本人から聞き、後日詳しい聞き取りを考えていたが、二〇一八年一〇月二六日死去したため調査が出来なくなった。

⑨ 杉村キナラブック（一八八八年九月一日―一九七三年九月九日）。金成マツの友人で旭川アイヌ文化伝承者。その三女杉村フサ（有形・無形文化伝統者一九二九年四月二日―二〇一八年一〇月二二日）。

⑩ 佐々木長左衛門。金成マツと知里幸恵の住む伝道所横の豊栄尋常小学校校長をしていた。葬儀は旭川六条教会で行われた。息子佐々木豊が近文アイヌ関連資料を寄贈し、それを北門中学校知里幸恵資料室が所蔵している。

⑪ 荒井源次郎エカシ。近文アイヌ土地所有権獲得運動等に貢献した。エカシと一緒に私の父千里文男もアイヌ土地登記に関わっている。娘荒井和子はアイヌ人教師にして私の小学校時代の恩師。私の母、綾子の友人。和子は近文アイヌ関連資料を北門中学校知里幸恵資料室に寄贈し、資料は現在もそこが所蔵している。北門中学校は私の母校で、現校舎立替工事に父の会社関わっている。

近文アイヌ関連の研究者

⑫ 浅野清氏。知里幸恵と金成マツの研究者。「知里幸恵 銀のしずく記念館（NPO法人知里森舎）」理事。「知里幸恵を愛し金成マツを尊敬する会」代表。

⑬ 藤本英夫。知里幸恵、知里真志保に関する著書多数。

⑭ 小野邦夫。金成マツ、知里幸恵等のDVD製作者。「知里幸恵 銀のしずく記念館」に所蔵。

⑮ 小野有五。知里幸恵に関する論文及び著書多数。

⑯ 小川正人。北海道博物館学芸副館長・研究部長・アイヌ民族文化研究センター長。近代北海道のアイヌ教育史に関する調査研究、近代アイヌ史研究に関する基礎的資料の収集・整理と提供、アイヌ史に関する研究情報の集積

と提供をしている。

- ①⑦ 吉本牧人。グロリアミッション札幌教会牧師。アイヌ伝道とアイヌ教育史についての研究者。

近文アイヌ関連の資料がある施設及びホームページ

- ①⑧ 日本聖公会旭川聖マルコ教会及び札幌キリスト教会・旭川市図書館、両施設が『旭川聖公会宣教百年史』所蔵。
①⑨ 知里幸恵 銀のしずく記念館に近文アイヌに関する書籍やDVDが所蔵。
②⑩ 札幌市アイヌ文化センター（サッポロピリカコタン）図書室、アイヌ関連や砂沢市太郎氏に関する書籍を所蔵。
②⑪ 旭川市図書館、北海道立図書館、北海道博物館図書室にアイヌ関連図書が所蔵されている。
②⑫ 北星学園大学図書館に『救世軍 ときのこゑ』が所蔵。
②⑬ 日本キリスト教団北海教区。アイヌ民族情報センターホームページ <https://www.douhoku.org/ainu/>
②⑭ ピアソン記念館、聖公会近文伝道所の前で撮影されたと言われる写真を所蔵。
②⑮ 十勝の活性化を考える会ホームページ「ピアソン夫妻 その九 イカンノさんの事」にピアソン記念館にある、聖公会近文伝道所の前で撮影されたと言われる写真とその解説が掲載
<https://blog.goo.ne.jp/tokatinokasseikawokangaerukai/e/ead9e38fca399cedebf6d94d351975c7>

参考文献

- ②⑥ 日本聖公会旭川聖マルコ教会『旭川聖公会宣教百年史』日本聖公会旭川聖マルコ教会、一九九六。
②⑦ 財団法人北海道文学館編『知里幸恵「アイヌ神謡集」への道』東京書籍、二〇〇三。
②⑧ 小川正人、山田伸一『アイヌ民族 近代の記録』草風館、一九九八。

- 29 藤本英夫、掛川源一郎『近代民衆の記録五 アイヌ 金成マツ日記』、一九八八。
- 30 宮島利光他『二一世紀ブックレット 二五 日本宣教の光と影 アイヌ伝道等をめぐって』いのちのことは社、二〇〇四。
- 31 金倉義慧『旭川・アイヌ民族の近現代史』高文研、二〇〇六。
- 32 福島恒雄『北海道キリスト教史』日本キリスト教団出版局、一九八二。
- 33 藤本英夫『アイヌ史の復権をコタンの痕跡―アイヌ人権史の一断面』旭川人権擁護委員連合会、一九七一、二九七―三二〇頁。
- 34 藤本英夫『銀のしづく降る降る』新潮社、一九七三。
- 35 藤本英夫『銀のしづく降る降るまわりに―知里幸恵の生涯』草風館、一九九一。
- 36 藤本英夫『知里幸恵―十七歳のウエペケレ』草風館、二〇〇二。
- 37 藤本英夫『知里真志保の生涯―アイヌ学復権の闘い』草風館、一九九四。
- 38 渋谷四郎『北海道写真史 幕末明治』平凡社、一九八三。
- 39 北海道大学付属図書館『明治大正期 北海道写真集』北海道大学附属図書館、一九九二（二三九頁に住居が新築された旭川近文アイヌ部落）。
- 40 佐藤喜一、松井恒幸『写真集ふるさとの想い出写真集明治大正昭和 旭川』国書刊行会、一九七九（八六頁にコタンの人々）。
- 41 白沢ナベ『アイヌとして生きて』日本基督教団出版 一九九三。
- 42 斎藤成二（部落解放センター活動委員長）『アイヌとキリスト教』二〇〇四、一二頁。
- 43 旭川竜谷高校郷土研究会『旭川アイヌの研究』二〇〇八。

- ④④ 堅田清司『北海道社会文庫通信』二〇〇一年一月一三一八号、二頁。
- ④⑤ 救世軍日本公報『ときのこゑ』不二出版、一九八七。
- ④⑥ 荒井和子『私の心の師 先生はアイヌでしょ』北海道出版企画センター、二〇一三。
- ④⑦ 荒井和子『焦らず 挫けず 迷わずに エポカシエカッチの苦難の青春』北海道新聞社、一九九三。
- ④⑧ 須知徳平『北の詩と人―アイヌ人女性・知里幸恵の生涯』岩手日報社、二〇一六。
- ④⑨ 中村敏『日本プロテスタント海外宣教史』新教出版社、二〇一一。
- ⑤⑩ 神葉笛『知里幸恵とアイヌのはなし（十一頁に推測で描かれた図面あり）』神葉笛書房、二〇一二。銀のしずく記念館所蔵。
- ⑤⑪ 下田尊久「ジョン・バチエラーが遺したもの…旭川におけるバイブル・ウーマンの足跡」『基督教學』第四八号、二〇一二。